

江戸時代の中期にあたる十八世紀中頃、浮世絵、特に「錦絵」と呼ばれる多色摺りの木版画が飛躍的に発達した。その発展をになった絵師の第一人者が、鈴木春信である。彼の浮世絵は庶民のための安価なものではない。旗本や豪商が趣向を凝らした版画の絵巻を作らせ交換したことが、芸術性向上の契機になった。本展は春信以前の作品から始まり、春信を中心にするが、彼の活動とともに表現力がみるみる増していくのが見て取れる。

富裕で知的な階層が注文主であったため、春信の浮世絵は日本や中国の古典的教養を背景としていることが多い。

情感あふれ、気品高く



「見立玉虫 屋島の合戦」中判錦絵2枚続のうち左。明和3～4（1766～67）年ごろ
Bequest of Miss Ellen Starkey Bates, 28.195 Photo©MFA, Boston

「見立玉虫 屋島の合戦」でも風雅を忘れない逸話とし（二七六六～六七〇年）では、娘が開いた扇を手に船のへさぎに立つ。源平の戦いの最中、平家の美女玉虫が扇を標的として船に掲げ、源氏の弓の名手那須与一が見事にそれを射落としたことは、戦中

でも風雅を忘れない逸話として語りつがれた。この絵は、その物語を当時の風俗に置き換えて描いている。娘の着物の柄は帆かけ船で、平家の船を思わせる。二枚組みの絵のもう一枚には、弓に矢をつがえる若衆が描かれている。江戸時代に流行したこのような「見立絵」は内容を理解するのに首をひねるが、各作品にわかりやすい解説がそえられている。

春信の浮世絵は、こまやかな情感にあふれ、品があり洗練されている。彼から影響を受けた喜多川歌麿らの作品が最後に展示され、春信の存在がいかに大きかったかを物語る。春信の現存する作品の多くは海外にある。傑出した絵師の生涯にわたる作品をまとめた形で見られるのは、同館で四年前に開かれた「北斎」展以来で、またとない機会である。

（浅野和生＝愛知教育大教授）

ボストン美術館浮世絵名品展 鈴木春信

岡本神草の時代展